

サルデーニャ語の名詞における 2 格体系の痕跡 —sorre 「姉妹」の成立過程を中心に—

金澤 雄介

(東京外国語大学グローバル COE リサーチフェロー・日本学術振興会)

要 旨

Come la maggior parte delle lingue romanze, il sardo ha eliminato la declinazione nominale latina. Gli studi precedenti considerano che il sardo antico *sorre* ‘sorella’ deriva dal nominativo latino *SOROR*. In questo studio, basandosi sui documenti sardi antichi e sulle regole fonetiche sarde, soprattutto la vocale epitetica, si mostrerà che *sorre* eredita non solo il nominativo *SOROR*. Invece si proporrà che *sorre* si è formata dal livellamento tra il nominativo *SOROR* e l’*accusativo* *SORÖREM* nel corso del sincretismo dei casi. Come prova di questa opinione si mostrerà che tale livellamento si è verificato anche in altre parole. Il risultato di questo studio sosterrà la teoria proposta da alcuni studi (es. Seidl 1995) che il sistema bicasuale è stato conservato nel protoromanzo parlato nella Sardegna, come nelle lingue galloromanze antiche.

1. はじめに

サルデーニャ語は、イタリアのサルデーニャ島で話されるロマンス諸語の 1 つである。話者はおよそ 150 万人であり、そのほとんどはイタリア語との二言語使用者である（金澤 2009: 424-426）。サルデーニャ語には大別して 2 つの方言が存在する。サルデーニャ島の中央部および北部で話されるログドーロ方言（Logudorese）と、島の南端に位置する州都カリアリ（Cagliari）を中心としたカンピダーノ平野で話されるカンピダーノ方言（Campidanese）である¹。

ロマンス諸語の共通の祖先であるラテン語では、名詞（および形容詞）の文法的関係は格変化によって示された。名詞の格変化は、古フランス語および古プロヴァンス語では 13 世紀ごろまで主格と斜格の 2 格体系が保持されていた（Lausberg 1966: 19, Penny 1980: 506 etc.）ものの、現代ロマンス諸語ではルーマニア語を除いて失われた。格変化の消滅

¹ サルデーニャ島の北東部に位置するガッルーラ地方ではガッルーラ方言（Gallurese）が、島の北西部ではサッサリ方言（Sassarese）が話されている。これらの方言はいずれもイタリア語との接触によって生じたものである。したがって Blasco Ferrer (1984: 186) や Wagner (1943) などは、ガッルーラ方言とサッサリ方言はサルデーニャ語の方言ではなく、イタリア語の方言として扱われるのが妥当であるとしている。

の結果、現代ロマンス諸語の名詞は一般的にラテン語の対格に由来する形式を継承している。ただし有生名詞については、ラテン語の主格に由来する形式を継承している場合もある (Elcock 1960: 67, Lausberg 1966: 64-65 etc.)。

サルデーニャ語をはじめとするロマンス諸語には、ラテン語の単一の格形式、すなわち主格か対格のいずれか一方の形式からは音変化によって導くことのできない語がある。本稿では、このような語は主格と対格におけるパラダイムの水平化によって作られたと主張する。この主張を裏付けるために、特にサルデーニャ語の *sorre* 「姉妹」の成立過程に焦点を当てつつ、ロマンス諸語におけるパラダイムの水平化のいくつかの事例について考察する。また本稿ではパラダイムの水平化についての考察を踏まえて、サルデーニャ語の先史には古フランス語および古プロヴァンス語と同様、名詞の2格体系が保存されていたという Seidl (1995) の見解が支持できることを示す。

2. ロマンス諸語の2格体系

本章では、ラテン語から現代ロマンス諸語にいたるまでの名詞形態論の通時変化、すなわち格変化の消滅の過程について概観する。

古典ラテン語における名詞の格には、主格、属格、与格、対格、奪格、呼格の6種類が存在した。第2変化名詞の格変化を表1に例示する。

表1 古典ラテン語の第2変化名詞 *MURUS* 「壁」のパラダイム

	SG.	PL.
NOM.	MURUS	MURĪ
GEN.	MURĪ	MURŌRUM
DAT.	MURŌ	MURIS
ACC.	MURUM	MURŌS
ABL.	MURŌ	MURIS
VOC.	MURE ²	MURE

表1に示したような名詞の格形式には、古典ラテン語の段階からすでに融合が生じていたという (Väänänen 1981: 111, Elcock 1960: 60)。格形式の融合のおよその過程は次のとおりである。属格、与格、奪格の形式は対格に融合し、これらの格の機能はすべて対格が担うようになった。この4つの格が融合した形式は斜格と呼ばれる。このような格形式の融合の要因として、属格、与格、奪格は前置詞プラス対格という分析的構造にとって代わられたこと、そして音変化によっていくつかの格語尾が同形になったことが挙げられる (Bourciez 1930: 87, Elcock 1960: 55 etc.)。

² 第2変化名詞を除いて、呼格は主格と同形であった。後に第2変化名詞でも呼格は主格に融合した。

以上で見た格変化の部分的な消滅の結果、名詞の格変化はロマンス祖語（俗ラテン語）において主格と対格の2格体系になった。俗ラテン語における第2変化名詞のパラダイムは表2のようであったと推定されている（Elcock 1960: 62）。

表2 ロマンス祖語 *murus* 「壁」のパラダイム

	SG.	PL.
NOM.	<i>murus</i>	<i>muri</i>
ACC.	<i>murū</i>	<i>muros</i>

冒頭でも述べたように、主格と対格の2格体系は、古フランス語および古プロヴァンス語に保存されている。表3に古フランス語における *murs* 「壁」のパラダイムを示す（Elcock 1960: 63, Zink 1994: 9）。

表3 古フランス語 *murs* 「壁」のパラダイム³

	SG.	PL.
NOM.	<i>murs</i>	<i>mur</i>
ACC.	<i>mur</i>	<i>murs</i>

表3に示したような名詞の2格体系は、現代フランス語では消滅した。現代ロマンス諸語ではルーマニア語を除いて名詞の格変化は継承されていない⁴。格変化の完全な消滅、すなわち主格と対格の融合にともない、現代ロマンス諸語の名詞は一般的にラテン語の対格の形式を継承している（Elcock 1960: 60, Seidl 1995: 57 etc.）。しかしながら、いくつか

³ 第1変化名詞では、単数対格はその語尾の *m* の消失によって単数主格と同形になった。複数主格は複数対格からの類推で *-as* を得た（Lausberg 1966: 27）。その結果、第1変化動詞では2格体系は消滅し、数の区別のみが残された。表1は古フランス語 *chevre* 「山羊」のパラダイムである。

表1 古フランス語 *chevre* 「山羊」のパラダイム

	SG.	PL.
NOM.	<i>chevre</i> (< CAPRA)	<i>chevres</i> (< *CAPRAS < CAPRAE)
ACC.	<i>chevre</i> (< CAPRAM)	<i>chevres</i> (< CAPRĀS)

⁴ ルーマニア語では主・対格、属・与格の2格体系が残されている（Lausberg 1966: 29, de Dardel / Wüest 1993: 54 etc.）。表2にルーマニア語 *capră* 「山羊」のパラダイムを示す。また特に固有名詞において、主・対格と属・与格に加えて呼格が用いられることもある。

表2 ルーマニア語 *capră* 「山羊」のパラダイム

	SG.	PL.
NOM.-ACC.	<i>capră</i>	<i>capre</i>
GEN.-DAT.	<i>capre</i>	<i>capre</i>

ちなみにレト・ロマンス語では、形容詞の男性単数形において主格に由来する形式が見られる。名詞を限定する場合の形容詞は、ラテン語の対格の形式に由来する：in *gat alv* (< ALBUM) ‘a white cat’。一方、述語として用いられる形容詞は、ラテン語の主格に由来する：*quei gat ei alvs* (< ALBUS) ‘this cat is white’（Schmid 1951-1952: 41, Lausberg 1966: 110）。

の有生名詞はラテン語の主格の形式を継承している。以下にラテン語の主格を継承しているロマンス諸語の名詞の例を示す。

- Rum. om, It. uomo 「男」 < Lat. NOM. HOMŌ (ACC. HOMINEM)
Rum. împărat 「皇帝」 < Lat. NOM. IMPERATOR (ACC. IMPERATŌREM)
It. ladro 「泥棒」 < Lat. NOM. LATRŌ (ACC. LATRŌNE)
It. compagno 「仲間」 < Lat. NOM. COMPANIŌ (ACC. COMPANIŌNEM)
It. moglie 「妻」 < Lat. NOM. MULIER (ACC. MULIEREM)
It. sarto, Sp.-Cat. sastre 「仕立て屋」 < Lat. NOM. SARTOR (ACC. SARTŌREM)
MFr. pâtre, Raet. paster 「牧人」 < Lat. NOM. PASTOR (ACC. PASTŌREM)

一方サルデーニャ語では、ほかのロマンス諸語と比較して、ラテン語の主格の形を継承している語は非常にまれである。上に挙げた語に対応するサルデーニャ語の同源語は、ラテン語の対格の形を継承している：ómine 「男」、ladróne 「泥棒」、muljère 「妻」。Seidl (1995: 50-51) によると、サルデーニャ語におけるラテン語の主格に由来する名詞は以下に示す語と4章以降で見る *sorre* のみであるという。DES においてもこれらの語はラテン語の主格に由来するとされている。

- Log.-Camp. sólus 「1つの」 < Lat. NOM. SOLUS (ACC. SOLUM) (DES II: 425)
Log.-Camp. síðis 「渴き」 < Lat. NOM. SITIS (ACC. SITIM) (DES II: 421-422)
Log. réze, Camp. arréze⁵ 「種族」 < Lat. NOM. RĒS (ACC. REM) (DES II: 353)
Log. mére, Camp. méri⁶ 「主人」 < Lat. NOM. MAJOR (ACC. MAJŌREM) (DES II: 108)

sólus, *síðis*, *réze* / *arréze* に関しては、語末の *s* (*z*) を保存していることから、ラテン語の主格に由来することは明らかである。*mére* / *méri* については DES (II: 108), Wagner (1938-1939: 82) でラテン語の主格 MAJOR を継承しているという見解が示されている。これらの研究によると、*mére* / *méri* は主格 MAJOR から *maire または *meire を経て生じたという：MAJOR > *maire > *meire > *mére* / *méri*。しかしながらこの見方では、語末添加母音 *e* (*i*) の音色が説明できない。サルデーニャ語では、子音で終わる語には語末添加母音が付加される。添加母音の音色は、ログドーロ方言では直前の音節の母音と同じになる。一方カンピダーノ方言では、直前の音節の母音が *i* と *e* の場合は *i* が、*u* と *o* の場合は *u* が、そして *a* の場合は *a* が付加される (Viridis 1978: 40)。したがって MAJOR に添加母音が付加される場合、その音色にはログドーロ方言では *o* が、カンピダーノ方言では *u* が予想される。また仮に対格 MAJŌREM に由来すると考えると、アクセントのある *o* の消失を考える必要が

⁵ サルデーニャ語では、ラテン語において単音節であった語に語末添加母音が付加される (Viridis 1978: 22, 39, Wagner 1984: 25-28)。また添加母音によって母音間に位置するようになった阻害音は弱体化をこうむる。

⁶ カンピダーノ方言では、語末音節高母音化によって、語末のアクセントのない *e* と *o* はそれぞれ *i* と *u* になった (Viridis 1978: 34-35)。

あるが、サルデーニャ語の音変化規則を考慮に入れると、このような変化は妥当性が低い。

このような見方に対して、Wagner (1984: 517) における Paulis の注釈では、Meiklejohn (1963)⁷ による見解が提示されている。そこでは、*mére / méri* はラテン語の呼格の形式 *MI HERE* (NOM. HERUS) 「私の主人よ」に由来するとされている。このように、*mére / méri* がどの格形式に由来するかという問題については、さらなる考察を必要とするが、本稿ではその詳細には立ち入らない。

ロマンス諸語には、ラテン語の主格を継承している語に加えて、属格あるいは奪格の形式を継承している語もある。ここでは Seidl (1995: 52-55) から、サルデーニャ語における例のみを挙げる。

<属格に由来する語>

kapuđánni 「9月」 < *CAPUT ANNĪ* (DES I: 293)

<奪格に由来する語>

issára 「その時」 < *IPSĀ HŌRĀ* (DES I: 683)

kenápura 「金曜日」 < *CENĀ PURĀ* (DES I: 328)

avestára 「今後」 < *AB ISTĀ HŌRĀ* (DES I: 155)

dómo 「家」 < *DOMŌ* (DES I: 476)

以上に示したように、従来の研究ではロマンス諸語における個々の名詞は、ラテン語のある単一の格形式に由来すると考えられてきた。実際、多くの語はこの見方によって説明可能である。しかしながら古サルデーニャ語の *sorre* 「姉妹」は、単一の格形式、つまり主格か対格のいずれか一方の形式からは音変化によって導くことはできない。4.1. と 4.2. では、*sorre* は歴史以前のサルデーニャ語、すなわち主格と対格の区別が失われる以前の段階で、この2つの格形式におけるパラダイムの水平化によって生じたことを、古サルデーニャ語文献に実際に現れる形式、およびサルデーニャ語におけるいくつかの音変化規則に基づいて主張する。

3. 古サルデーニャ語文献について

サルデーニャ語の2大方言であるログドーロ方言とカンピダノー方言の差異は、古サルデーニャ語⁸ 文献においてすでに観察される。本稿では古ログドーロ方言の文献として *Condaghe di San Pietro di Silki* および *Condaghe di San Nicola di Trullas* を、古カンピダノー方言の文献として *Carte Volgari* を用いる。本章では、本稿で扱う古サルデーニャ語文献について概説をおこなう。

⁷ M. F. M. Meiklejohn (1963): “*Mere*, problema linguistico sardo” in: *Italia Dialettale* 25: 145-146. (筆者未見)

⁸ 古サルデーニャ語とは、Giudicato (脚注9参照) がサルデーニャ島を統治していた11世紀から14世紀頃のサルデーニャ語を指す (Blasco Ferrer 1984: 64)。

3.1. *Condaghe di San Pietro di Silki* (CSPS)

Condaghe di San Pietro di Silki とは、サルデーニャ島北西部に位置するサッサリ (Sassari) にある San Pietro di Silki 修道院にて作成されたコンダーゲ (condaghe) に、San Quirico di Sauren と Santa Maria di Cordongianus の2つの修道院におけるコンダーゲと、San Pietro di Silki 修道院で新たに書かれたコンダーゲを統合して作られた文書の総称である。コンダーゲとは、ビザンツ帝国の統治時代に借用されたギリシャ語 κοντάκιον 「羊皮紙を巻きつける棒切れ」に由来し、修道院で作成された公文書を指す。コンダーゲには訴訟、土地売買の契約、領土の分配および画定、財産および遺産の譲渡、物々交換等に関する記録がなされた。CSPS は全部で 443 節からなる。Blasco Ferrer (2002: 506) によると、現存している CSPS は、San Pietro di Silki 修道院の Massimilia 修道院長による 1150 年から 1180 年にかけての写本であるという。本稿では CSPS のテキストとして、Delogu (1997) の校訂本を用いる。

3.2. *Condaghe di San Nicola di Trullas* (CSNT)

Condaghe di San Nicola di Trullas は、ログドーロ地方の西部、ポッツォマッジョーレ (Pozzomaggiore) 近郊にある San Nicola di Trullas 修道院にて作成されたコンダーゲで、計 332 節からなる。現存する CSNT は CSPS と同様、後代に作成された写本のみである。本稿では Merci (2001) の校訂本を参照する。

3.3. *Carte Volgari* (CV)

Carte Volgari は、カリアリ国⁹の歴代の王 (Giudice) からカリアリ大司教 (Arcivescovado di Cagliari), あるいはカリアリ北部に存在したスエッリ司教 (Vescovado di Suelli) に対する財産、土地などの寄進を記録した文書の総称である。1070 年から 1226 年にかけての文書が残存しており、計 21 編からなる。CV を構成する 21 編のうち 16 編はオリジナルが残されている。一方残りの 5 編、すなわちテキスト番号 1, 7, 15, 20, 21 は、15 世紀以降の写本のみが現存している。本稿では CV のテキストとして、Solmi (1905) を使用する¹⁰。

4. サルデーニャ語における *sorre* の成立過程と、主格と対格の水平化

本章では、サルデーニャ語 *sorre* 「姉妹」の成立過程に対する先行研究の見方とその問題点について議論する。そして *sorre* はパラダイムの水平化によって作られたと考えられることを示す。ここで言う水平化とは、異なる格形式間における語幹の交替の排除、つまり主格の影響によってアクセント位置が主格と同一になった二次的な対格が生じることを意味する。また本章では、主格と対格の水平化は *sorre* 以外の名詞にも観察されることを、サルデーニャ語およびほかのロマンス諸語の例から示す。

⁹ 中世サルデーニャには、Giudicato と呼ばれる 4 つの王国が存在した。カリアリ国はそのうちの 1 つで、ほかにはトッレス (Torres), ガッルーラ (Gallura), アルボレア (Arborea) がある。古サルデーニャ語文献には、Giudicato から教会に対する寄進の内容を記録したものが多く見られる。

¹⁰ 古サルデーニャ語文献における文字 (綴り) と音の対応については、ラテン語やロマンス諸語におけるそれとほぼ同様である。注意すべき対応については金澤 (2011: 27-66) を参照していただきたい。

4.1. *sorre* の形成過程に関する先行研究における見方とその問題点

古サルデーニャ語文献における、ラテン語の *SOROR* (NOM.) / *SORÖREM* (ACC.) (以上単数形), *SORÖRES* (NOM.) / *SORÖRES* (ACC.) (以上複数形)「姉妹」に対応する形式は以下に示すとおりである。ちなみに現代サルデーニャ語では *Log. sórre* (SG.), *sórres* (PL.), *Camp. sórri*¹¹ (SG.), *sórris* (PL.) (DES II: 428) となる。

Intraiti-nos ad nois Justa Pertethe, et ad Padule Istefania sa sorre (CSPS: 17)¹²
belong.PF.3SG-US to us J. P. and to P. I. the sister

「Justa Pertethe は我々のものに、そしてその姉妹である Istefania は Padule のものとなった」

その他の用例は以下のとおりである。

<単数形>

sorre (CSPS: 56, 63, 67, 74, 85, 131, 133, 140, 158 etc. CSNT: 5, 10, 20, 49, 74, 120, 164, 176, 177, 180 etc.), *sorri* (CV: 14)¹³

<複数形>

sorres (CSPS: 97, 283, 353. CSNT: 70), *sorris* (CV: 13)

ここで、古サルデーニャ語文献において *sorre* をはじめとする諸形式（以下 *sorre* とする）が担う文法的役割について触れる。古サルデーニャ語では名詞の 2 格体系はすでに消滅していたので、*sorre* が主語（主格）あるいはその他の文法的役割（対格）のどちらを担うかは、前置詞の有無および語順によって判断される。表 5 は、古サルデーニャ語文献における *sorre* が担う文法的役割の頻度を数値化したものである。この表から、*sorre* は主格としても対格としても用いられており、特定の文法的役割を担う形ではないといえる。

¹¹ カンビダーノ方言では、語末音節高母音化（脚注 6 参照）によって語末の e が i になった。

¹² 古サルデーニャ語の各例の後ろの () 内に示した数字は、それぞれのサルデーニャ語文献でその形式が現れる節番号を指す。

¹³ CSPS には *soror* というラテン語の主格と同一の形式が 1 例観察される。ラテン語の影響を受けている語 (It. latinismo) であると考えられる。

Ego Maximilla abbatissa de scu. Petru de Silki, et soror Bullia Faue, ki lu fatho custu
I M. superioress of St. P. de S. and sister B. F. REL.NOM. it.ACC. make.IND.PRES.1SG. this
condake, cun boluntate de deus... (CSPS: 347)

condaghe with will of God

「神の意志によってこのコンダゲを作る、St. Pietro de Silki 修道院の修道院長である私 Maximilla と姉妹である Bullia Faue は ...」

表5 古サルデーニャ語文献における *sorre* の文法的役割

	SG. (<i>sorre</i>)		PL. (<i>sorres</i>)	
	主語 (主格)	それ以外 (対格)	主語 (主格)	それ以外 (対格)
CSPS	22	18	0	3
CSNT	3	18	0	1
CV	1	0	0	1
計	26	36	0	5

なお、サルデーニャ語（およびイベロ・ロマンス諸語とイタリア語南部方言）では直接目的語が有生名詞である場合、前置詞 *a(d)* (< Lat. *AD*) をともなうという特徴がある (Blasco Ferrer 1984: 83-84)。古サルデーニャ語において *sorre* が *a(d)* をともなう直接目的語として用いられる例が1つ、以下の文に観察される。

Ecco sos homines ki mi derun: ad Pantaleo integru, et issa sorre Furata
 here the men REL.ACC. me.DAT. give.PF.3PL. AD P. entire and his sister F.
integra... (CSNT: 281)

entire

「彼らは以下の奴隷たちを私に与えた：完全奴隷 *Pantaleo*、彼の姉妹の完全奴隷 *Furata*...」

サルデーニャ語の *sorre* の形成過程については先行研究でも議論がおこなわれている。先行研究の見方を検討する前に、ラテン語 *SOROR* の主格と対格の形と、その形態論的特徴について概観する。ラテン語 *SOROR* は第3変化名詞に属していた。第3変化名詞に属するいくつかの名詞には、単数主格以外の形式の音節数が単数主格の音節数よりも1つ多いという特徴があった。また第3変化名詞には、単数主格とそれ以外の形式の間でアクセント位置が異なるという特徴を持つ名詞もある (Lausberg 1966: 72-85)。*SOROR* は今述べた両方の特徴を持ち合わせる名詞である。表6に *SOROR* の主格と対格の形とそのアクセント位置を、語幹と語尾の境界も含めて示す (Lausberg 1966: 78)。

表6 ラテン語 *SOROR* の主格と対格の形とアクセント位置

	SG.	PL.
NOM.	SÓROR	SORÓR-ES
ACC.	SORÓR-EM	SORÓR-ES

すでに述べたように、ロマンス諸語の名詞はラテン語の対格の形式を継承しているのが一般的であるが、いくつかの有生名詞は主格に由来する。Lausberg (1966: 78) によると、「姉妹」という有生物を表す名詞 *sorre* は対格 *SORÖREM* ではなく、主格 *SOROR* に由来するという¹⁴。

Meyer-Lübke (1902: 15), Wagner (1984: 45), DES (II: 428) も同様に、サルデーニャ語の *sorre* は主格 *SOROR* に由来すると述べている。ここでは、*SOROR* から *sorre* にいたるまでの変化について、2つの *r* に挟まれたアクセントのない *o* の消失と、語末添加母音 *e* の付加を仮定している：*SOROR* > **sorr* > *sorre*。2つの *r* に挟まれたアクセントのない母音の消失という変化は、俗ラテン語 **mórere*¹⁵ (INF.)「死ぬ」でも観察されるという。Wagner (1984: 45) では、この変化によって古サルデーニャ語の *morre* (CSPS: 252), *morri* (CV: 13, 17) が得られると推定されている。

しかしながら、*sorre* がラテン語の主格 *SOROR* に由来するという先行研究の主張には、次に示す2つの観点から問題がある。1つは、*r* に挟まれたアクセントのない母音の消失という規則の妥当性である。サルデーニャ語ではラテン語のアクセントのある母音と同様、アクセントのない母音も一般的に保存される (Wagner 1984: 42)。また *SOROR* におけるアクセントのない *o* は語末音節母音である。サルデーニャ語は開音節言語であり、たとえアクセントがなくても語末音節母音は保存されるのが一般的であり、閉音節を生み出すような変化は起こらない (Wagner 1984: 69)。したがって2つの *r* の間という、きわめて限定的な環境でのみ母音が消失するという現象は、サルデーニャ語の音変化規則から見てその妥当性は低い。

先行研究の見方のもう1つの問題点は、*sorre* に含まれる *e* を語末添加母音と考えることである。2章で、サルデーニャ語では子音で終わる語に語末添加母音が付加されること、そして方言ごとに添加母音の音色に規則があることはすでに述べた。方言ごとの添加母音の音色に関する規則から、仮に **sorr* に語末添加母音が付加されたと考える場合、その音色にはログドローロ方言では *o* (**sorro*)、カンピダーノ方言では *u* (**sorru*) が予測され、実際の *e* が付加されることについて説明できない¹⁶。

Wagner (1984: 487) における Paulis の注釈では、*SOROR* における語末添加母音として *e* ではなく *o* が付加されるはずであると述べられている。その上で Paulis は、複数形 *SORORES* における “*dissimilazione sillabica*” (音節の異化=ハプロロジー) によって *o* が消失した **sorres* からの逆形成によって単数形 *sorre* が作られたと推定している¹⁷。すなわち **sorres* から複数を標示する語尾 *s* を取り除くことで単数形の *sorre* を作り出すという過程を述べているものととらえられる：*SORORES* > **sorres* → *sorre*。しかしながら、どのような要因であれ、アクセントのある母音 *o* (< *o*) が消失するという変化はサルデーニャ語には観察されず、また通言語的に見ても自然な変化であるとは言いにくい。よって Paulis の見

¹⁴ Blasco Ferrer (1984: 81) は、*sorre* はラテン語の呼格に由来すると述べている。第3変化名詞では主格と呼格は同形であるので、ほかの先行研究と実質は同じ見方であると解釈して差し支えない。

¹⁵ 古典ラテン語では第III変化のデポネント動詞 *MORI* であった。ロマンス諸語ではデポネント動詞は消失し、サルデーニャ語では第2変化動詞の **mórere* に由来する形が継承されている。

¹⁶ Wagner (1984: 323) は、添加母音に *o* ではなく *e* が付加されていることについては、特殊な事例 (un caso particolare) であると述べている。

¹⁷ DES (II: 428) に引用されている Carlo Salvioni (1909): “Bricciche sarde” in *Archivio storico sardo* 5. 211-246. (筆者未見) も同様に、*sorr* に添加母音が付くのであれば *o* が予想されると述べているようである。Salvioni は、*sorre* は *soror* における “*sdoppiamento sillabico*” (音節の分割) によって作られたと推定しているが、この “*sdoppiamento sillabico*” が具体的にどのような変化であったかは述べられていない。おそらく、**sorr* における *rr* という連続は音節構造に違反するので、*rr* を別々の音節に分割するために *e* を付加した、という意味であると思われる。

方も *sorre* の成立過程に対して十分な説明を与えているとはいえない。

ここまでの議論から、*sorre* がラテン語の主格 *SOROR* にのみ由来すると考えることはいくつかの問題を抱えていることが明らかになった。また、無生物名詞と同様、*sorre* は対格 *SOROREM* にのみ由来すると考えることも妥当とはいえない。*SOROREM* から *sorre* を導くためには *o* の消失を想定する必要があるが、上でも述べたように、やはりアクセントのある母音が消失することは考えにくいからである。

4.2. 対格と主格におけるパラダイムの水平化

前節では、古サルデーニャ語の *sorre* がラテン語の主格 *SOROR* にのみ由来すると考えている先行研究の問題点の1つとして、語末の *e* が子音で終わる語における添加母音であるとみなしていることを挙げた。本稿では *sorre* に含まれる語末の *e* は添加母音ではなく、本来的な母音であると考え。本来的な母音と考えることの根拠の1つとして、古カンピダーノ方言で書かれた文献 (CV) では、子音で終わる語における語末添加母音は表記されるが、古ログドーロ方言で書かれた文献 (CSPS, CSNT) では表記されないことが挙げられる (金澤 2011: 38)。この事実は、表7の古ログドーロ方言と古カンピダーノ方言における同源語からも明らかである。

表7 古サルデーニャ語における添加母音の表記の有無

Lat.	Log.	Camp.	
EST	est (CSPS: 2, 4, 10, etc. CSNT: 50, 56, 65 etc.)	esti (CV: 11, 14)	「～である」(IND.PRES.3SG.)
POSUIT	posit (CSPS: 40, 41, 49 etc. CSNT: 14, 18, 21 etc.)	positi (CV: 8)	「寄進する」(PF.3SG.)
HABĒBANT	abean (CSPS: 33. CSNT: 15, 50, 73 etc.)	abeanta (CV: 10)	「持つ」(IND.IMPF.3PL.)

表7に示した語を考慮に入れると、少なくとも古ログドーロ方言においては、*sorre* における語末の *e* は添加母音ではないという推測が成り立つ。

すでに示したように、ラテン語の対格 *SOROREM* の語末音節母音は *e* である。したがって、*sorre* に含まれる *e* は対格 *SOROREM* に含まれる *e* に由来する可能性がある。しかしながら前節でも述べたように、*sorre* が対格 *SOROREM* のみに由来すると考えることはできない。そこで本稿では、*sorre* の成立過程において、主格 *SOROR* の影響によって二次的に作られた対格 **sórore* が生じたと考え¹⁸。4.1. で示したようにいくつかの第3変化名詞では、単数主格のアクセント位置がほかの格形式と異なるという特徴があった。このようなアクセント位置の違いは、パラダイムの水平化によって排除されたと考える。つまり主格の影響に

¹⁸ ロマンズ諸語では、アクセントのない音節に含まれる語末の *m* は消失する (Lausberg 1965: 425)。

よって対格のアクセント位置が第1音節に移動し、二次的な対格 *sórrore が生じた。以下では、*sórrore から sorre が導かれる過程について考察する。

sorre の形成過程を説明するために本稿では、*sórrore は前次末音節にアクセントを持つ語であることに着目する。金澤 (2011: 80-81) では、サルデーニャ語の第2変化動詞の不定詞における語根末共鳴音の重子音化について、前次末音節におけるアクセントのある母音からの [+stiff vocal folds]¹⁹ の波及によって生じたと主張した：TENÈRE > *ténere > *ténner > tenne (CSPS: 31) 「持つ」、QUAERÈRE > *kéreere > *kerrere > kerri (CV: 18) 「欲する」。名詞および形容詞の例：GÈNÈRUM > Log. bènneru, Camp. dʒénneru 「義理の息子」、TÈNÈRUM > Log.-Camp. ténneru 「柔らかい」、ARĪDUM > Log.-Camp. árriðu 「乾いた」。[+stiff vocal folds] の波及にともなう重子音化は前次末音節アクセント語の *sórrore にも生じることが予想され、その結果 *sórrore が得られる。この過程は、自律分節音韻論の枠組みを用いると、図1のように図式化できる。

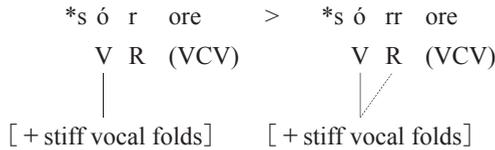


図1 [+stiff vocal folds] の波及による共鳴音の重子音化 (R=共鳴音)

次に、*sórrore におけるハプロロジーによって第2音節の ro が消失することによって sorre が得られると考える。このような r を含む音節におけるハプロロジーは、*mórerant > *mórrerant > morran (IND.PLPF.3PL.) (CSPS: 40) 「死ぬ」や、NARRÁ(VE)RUNT > *narrárun > narrun (PF.3PL.) (CSPS: 394) 「言う」などにも観察される。

4.1. で、古サルデーニャ語の morre (INF.) 「死ぬ」は2つの r に挟まれた e の消失によって *móreere から導くことができるとする先行研究の見方を示した。morre にいたるまでの変化についても、[+stiff vocal folds] の波及にともなう重子音化と、r を含む音節のハプロロジーを適用すれば、2つの r に挟まれた e の消失という個別の変化を仮定する必要はなくなる：*móreere > *mórrere > morre。

以上の考察から本稿では、sorre はラテン語の主格 SOROR と対格 SOROREM におけるパラダイムの水平化、すなわち主格の影響によってアクセント位置が移動した対格 *sórrore から生じたと主張する。sorre の成立過程は、表8のようにまとめることができる。

¹⁹ [+stiff vocal folds] とは、声帯の緊張を指定する弁別素性である (Roca / Johnson 1999: 701)。アクセントのある母音はアクセントのない母音と比較して、声帯の緊張をとまって調音される。声帯の緊張はその振動を妨げ、母音は高いピッチで実現される。一方重子音は単子音と比較して調音時間が長く、また多くのエネルギーを必要とする (Ladefoged / Maddieson 1996: 97)。本稿ではこのような性質に着目し、アクセントのある母音と重子音はいずれも [+stiff vocal folds] によって特徴づけられると考える。

表8 sorre の成立過程のまとめ

(ラテン語) NOM. SOROR / ACC. SORÓREM
↓ (1) 主格と対格の水平化
(サルデーニャ島におけるロマンス祖語)
NOM. *sóror / ACC. *sórore
↓ (2) [+stiff vocal folds] の波及にともなう r の重子音化
(NOM. *sóror?) / ACC. *sórrore
↓ (3) r を含む音節におけるハプロロジー
(古サルデーニャ語) sorre

表8に示したように、古サルデーニャ語では主格と対格は融合し、両者の区別は存在しない。しかしながら主格と対格の融合がほかの音変化と比較してどの段階で生じたかということについては、本稿の分析の範囲では明らかにすることはできない。

4.3. ほかのロマンス諸語における SOROR に対応する語

ほかのロマンス諸語におけるラテン語 SOROR に対応する語は以下のとおりである²⁰。Lausberg (1966: 77-78) はいずれの語も主格 SOROR に由来するという見方を示している。

Rum. NOM.-ACC. soră (GEN.-DAT. surori), It. suora, Raet. sour, OFr. NOM. suer / ACC. sereur, OProv. NOM. sorre / ACC. seror, Cat.-Sp. sor, Port. sor

ここで、各ロマンス諸語における SOROR の変化の過程について簡単に触れておく。古プロヴァンス語の主格 sorre では、語末に添加母音 e が付加されている。Grandgent (1905: 33) によると、古プロヴァンス語では語末音節母音の消失によって許容されない子音連続が生じると、支え母音 e が添加されるという：SOROR > *SORR > sorre。カタルーニャ語、スペイン語、ポルトガル語では語末の or が消失する。イタリア語とルーマニア語では、or が消失した後に a が付加されている。イタリア語とルーマニア語の例では、Tekavčić (1972: 46) によると、「姉妹」という意味的な理由から女性名詞を標示する語尾 a が付加されたという。

以上に見たように、SOROR はロマンス諸語の下位分類ごとに異なる変化をこうむった。すなわち、西ロマンス諸語に属するガロ・ロマンス諸語（古フランス語、古プロヴァンス語）とイベロ・ロマンス諸語（スペイン語、カタルーニャ語、ポルトガル語）ではそれぞれ2格体系の保存と or の消失が見られる。一方、東ロマンス諸語（ルーマニア語、イタリア語）では or の消失に加えて a が付加された。そして4.2. で見たように、サルデーニャ

²⁰ イタリア語では指小辞をともなった sorella に、スペイン語、カタルーニャ語、ポルトガル語ではラテン語 GERMANA 「姉妹」に由来する hermana, germà, irmão にそれぞれとって代わられている。また現代フランス語と現代プロヴァンス語では主格に由来する soeur と sorre が継承されている。

語では主格と対格の水平化が生じた。このような SOROR の変化の多様性は、各ロマンス諸語における「姉妹」を表す語が古典ラテン語 SOROR, あるいはロマンス祖語（俗ラテン語）における単一の祖形に直接さかのぼるのではなく、すでにロマンス祖語の段階で複数の地域的変種に分岐していた可能性を示唆している。このように考えると、SOROR における主格と対格の水平化は、サルデーニャ語がロマンス祖語から分岐した後に生じた変化ということになる。

4.4. サルデーニャ語およびほかのロマンス諸語における、その他の名詞に見られる主格と対格の水平化

Seidl (1995) は、サルデーニャ語およびイベロ・ロマンス諸語には、4.2. で見た *sorre* 以外にも、主格と対格における水平化によって生じた形に由来する語があることを指摘している。以下では、Seidl (1995) に挙げられている、主格と対格の水平化に由来する名詞について考察する。

Comp. *sérpi* (F.) 「蛇」は古典ラテン語の NOM. SERPĒNS, ACC. SERPENTEM 「蛇」に対応する。しかしながら *sérpi* は主格と対格どちらからも音変化によって導くことはできない。Seidl (1995: 58) は、*sérpi* は *n* が消失した主格 **serpēs* の影響で作られた二次的な対格 **serpem* から生じたと考えている。すなわち、主格と対格における音節数を等しくし、語幹の交替を排除することで、パラダイムの水平化をもたらしている。同様に、古スペイン語 *sierpe* も、**serpem* からアクセントのある *e* の二重母音化によって導くことができるという²¹。

Log. *séneke* (M.) 「老人」は古典ラテン語の NOM. SENEX, ACC. SENEM 「老人」に対応する。この語もやはり主格と対格どちらからも音変化によって導くことはできない。Seidl (1995: 58) によると、*séneke* は主格からの影響によって語幹末の *k* を得た二次的な対格 **senekem* に由来するという。

Log. *póqdje* (F.) 「小麦粉」は古典ラテン語 NOM. POLLEN, ACC. POLLINEM 「粉」に対応する。この語は無生物名詞であるので、対格に由来すると予想できるが、POLLINEM からは音変化によって導くことができない。Seidl (1995: 64) によるとこの語は主格 POLLEN の影響によって主格と音節数が等しくなった対格 **pollem* に由来するという²²。

主格と対格の水平化は、レト・ロマンス語にも観察される。レト・ロマンス語エンガディン方言（スイス・エンガディン地方）では「おい・めい」を表す語は *neiv* である。この語はラテン語の NOM. NĒPOS / ACC. NĒPŌTEM 「おい・めい」に由来する。Lausberg (1966: 85) によると、スルセルヴァン方言（スイス・スルセルヴァ地方）では主格 NĒPOS に由来する *nevs* が残されている。これは語末の *s* が保存されていることから明らかである。一方、エンガディン方言の *neiv* は、主格からの類推によって作られた二次的な対格に由来するという。Lausberg の主張するこの変化は、ここまで見てきた例と同様、主格と対格におけるパラダイムの水平化と同じであると解釈することができる。すなわち、*neiv* における二重母音 *ei* を導くためには、主格 NĒPOS に含まれるアクセントのある *e* を継承していると考

²¹ 現代スペイン語では、ラテン語の対格に由来する *serpiente* が用いられている。

²² なおサルデーニャ語には本来の対格 POLLINEM を継承している *póqdjine* も見受けられる (DES II: 290)。

えなければならない²³。一方、語末の s が消失しているという点では、対格 NEPÓTEM に由来するといえる。したがって neiv は、主格の影響によってアクセントが第 1 音節の e に移動した対格 *népote に由来すると推定できる。以上に示したように neiv は、対格のアクセント位置が主格と同じになるという、サルデーニャ語 sorre と同様の水平化を経て作られた語であるといえる。

5. 主格と対格の水平化と、ロマンス祖語における 2 格体系との関連

前章ではサルデーニャ語の sorre を中心として、ロマンス諸語には主格と対格の水平化によって作られた語が存在することを見た。本章では、主格と対格における水平化とロマンス諸語における 2 格体系の消滅との関連について若干の考察を加える。

Hall (1980: 267) はルーマニア語と 13 世紀までのガロ・ロマンス諸語において、部分的にはあるが名詞の格変化が残されていることを根拠に、ラテン語の格形式の融合は突発的な現象ではなく、段階的でゆるやかな過程を経たと推定している。その上で、イベロ・ロマンス祖語やサルデーニャ語の先史においても、古フランス語などと同様に 2 格体系が保存されていたという見解を示している。Seidl (1995: 65) はこのような考え方について、サルデーニャ語とイベロ・ロマンス諸語において主格と対格の水平化が生じていることから支持されると述べている。sorre が主格と対格における水平化によって生じたという本稿の主張は、サルデーニャ島で話されていたロマンス祖語において 2 格体系が保存されていたという Seidl の見方に対する 1 つの傍証となりえる。

サルデーニャ島で話されていたロマンス祖語が 2 格体系を保存していたという主張は、ロマンス諸語におけるサルデーニャ語の保守的性質からも支持できる。サルデーニャ島は紀元前 238 年という、もっとも早い時期にローマ帝国の属州となった地域である。したがって、サルデーニャ語は比較的古い時代のラテン語に基づいて形成されたといえる。実際サルデーニャ語は、ロマンス諸語の中でもっともラテン語に近い特徴を保存している (Jones 1988: 314)。したがってサルデーニャ語の先史において名詞の 2 格体系が保存されていること、またその痕跡が現代サルデーニャ語に残されていることは十分に考えられることである²⁴。

6. まとめと課題

本稿では、従来の研究においてラテン語の主格 SOROR に由来すると考えられてきたサルデーニャ語の sorre は、主格 SOROR と対格 SORÖREM におけるパラダイムの水平化によって

²³ レト・ロマンス語では開音節におけるアクセントのある短母音 *e* は二重母音化をこうむり *ei* になる (Lausberg 1965: 227) : PÉDEM > pei 「足」、BÈNE > bein 「良い」。

²⁴ この点に関して、Seidl (1995: 71) も述べているように、なぜサルデーニャ語では 2 格体系がガロ・ロマンス諸語やルーマニア語よりも早い段階で失われたのか、という疑問が生じる。この問題に対して Penny (1980: 503, 507n.) は、古フランス語や古プロヴァンス語はゲルマン語との接触によって、ルーマニア語はスラブ語との接触によって格体系が保存されていると推定している。格体系の保存と周辺諸語との接触にまつわる問題は、今後さらなる考察を必要とするテーマである。

生じた形式に由来すると結論づけた。そして主格と対格の水平化を仮定することで、サルデーニャ語の音変化の観点からも *sorre* の成立過程を問題なく説明できることを示した。

主格と対格の水平化は、サルデーニャ語の別の語、またはほかのロマンス諸語にも観察されることを示した。4.4. で見た、Seidl (1995) に挙げられている例からも分かるように、ラテン語から現代ロマンス諸語にいたる間に格形式が融合していく過程で、主格と対格における水平化はまれな現象ではなかった。水平化が起こるということは、ラテン語の名詞の格体系の消滅が段階的な過程であったこと、そしてそれぞれの言語の先史において2格体系が保存されていたことを示唆している。本稿はサルデーニャ語の *sorre* が主格と対格の水平化によって生じたことを示すことで、サルデーニャ語の先史において2格体系が保存されていたという見方をより確かなものとした。

しかしながら問題点も存在する。1つは、主格と対格の水平化が生じたことを検証する実例として、サルデーニャ語では *sorre* のみしか提示できなかったことである。*sorre* 以外の水平化の実例については、本稿では扱わなかった古サルデーニャ語文献を観察することで得られる可能性がある。もう1つの問題は、表8でも示したように、古サルデーニャ語 *sorre* にいたるまでに生じたいくつかの音変化と比較して、主格と対格の融合が生じた相対的な時期について明らかにできなかったことである。サルデーニャ語における2格体系の消滅は記録以前の段階で生じたので、その時期および過程を正確に把握することは困難であると言わざるをえない。しかしながら本稿でおこなったように、古文献における実例を詳しく分析することで、記録以前の名詞形態論の変化をある程度まで知ることができる。今後はサルデーニャ語のみならずほかのロマンス諸語の諸例も視野に入れつつ、格体系の消滅の過程を中心とした名詞形態論の歴史についてさらなる分析を進めたい。

略号一覧

ABL. = 奪格, ACC. = 対格, Camp. = カンピダーノ方言, Cat. = カタルーニャ語, DAT. = 与格, F. = 女性, GEN. = 属格, IMPF. = 半過去, IND. = 直説法, INF. = 不定詞, It. = イタリア語, Lat. = ラテン語, Log. = ログドーロ方言, M. = 男性, MFr. = 現代フランス語, NOM. = 主格, OFr. = 古フランス語, OProv. = 古プロヴァンス語, PF. = 完了, PL. = 複数, PLPF. = 大過去, Port. = ポルトガル語, PRES. = 現在, Raet. = レト・ロマンス語, REL. = 関係詞, Rum. = ルーマニア語, SG. = 単数, Sp. = スペイン語, VOC. = 呼格, 1-3 = 人称

参考文献

- 金澤雄介 (2009) 「サルジニア語」梶茂樹・中島由美・林徹 (編) 『事典 世界のことは141』東京:大修館書店, 424-427.
- (2011) 『サルデーニャ語動詞形態論の通時的研究』京都:松香堂.
- Blasco Ferrer, Eduardo (1984): *Storia linguistica della Sardegna*. Tübingen: Max Niemeyer.
- (2002) *Linguistica sarda. Storia, metodi, problemi*. Cagliari: Condaghes.

- Bourciez, Édouard (1930³) *Éléments de linguistique romane*. Paris: Klincksieck. (1910年初版)
- Coetsem, F. van / Linda R. Waugh (eds.) (1980) *Contributions to Historical Linguistics*. Leiden: Brill.
- Dardel, Robert de / Jakob Wüest (1993) “Le système casuels du protoroman. Le deux cycles du simplification” in: *Vox Romanica* 52: 25-65.
- Delogu, Ignazio (1997) *Il condaghe di San Pietro di Silki. Testo logudorese inedito dei secoli XI-XIII*. Sassari: Dessi.
- Elcock, W. D. (1960) *The Romance Languages*. London: Faber and Faber.
- Grandgent, C. H. (1905) *An outline of the phonology and morphology of Old Provençal*. Boston: D. C. Heath & Co.
- Hall, Robert A. Jr. (1980) “The Gradual Decline of Case in Romance Substantives” in: Coetsem, F. van / Linda R. Waugh (eds.): *Contributions to Historical Linguistics*. Leiden: Brill. 261-169.
- Harris, Martin / Nigel Vincent (eds.) (1988) *The Romance Languages*. New York: Oxford U. P.
- Jones, Michael Allan (1988) “Sardinian” in: Harris, Martin / Nigel Vincent (eds.): *The Romance Languages*. New York: Oxford U. P.
- Ladefoged, Peter / Ian Maddieson (1996) *The Sounds of the World's Languages*. Oxford: Blackwell.
- Lausberg, Heinrich (1965) *Lingüística románica I. Fonética*. Madrid: Gredos.
- (1966) *Lingüística románica II. Morfología*. Madrid: Gredos.
- Merci, Paolo (2001) *Il Condaghe di San Nicola di Trullas*. Nuoro: Ilisso Edizioni.
- Meyer-Lübke, Wilhelm (1902) “Zur Kenntniss des Altlogudoresischen” *Sitzungsberichte der Kaiserlichen Akademie der Wissenschaften*. Band 145. Vienna: C. Gerold's Sohn.
- Penny, Ralph (1980) “Do Romance Nouns Descend from the Latin Accusative? Preliminaries to a Reassessment of the Noun-Morphology of Romance” in: *Romance Philology* 33: 501-509.
- Roca, Iggy / Wyn Johnson (1999) *A Course in Phonology*. Oxford: Blackwell.
- Schmid, Heinrich (1951-1952) “Zur Geschichte der rätoromanischen Deklination” in: *Vox Romanica* 12: 21-81.
- Seidl, Christian (1995) “Le système acasuel des protoromans ibérique et sarde: dogmes et faits” in: *Vox Romanica* 54: 41-73.
- Solmi, Arrigo (1905) “Le carte volgari dell'archivio arcivescovile di Cagliari. Testi Campidanesei dei secoli XI=XIII” in: *Archivio storico italiano* 5: 35. 277-330.
- Tekavčić, Pavao (1972) *Grammatica storica dell'italiano. Volume II: Morfosintassi*. Bologna: il Mulino.
- Väänänen, Veikko (1981³) *Introduction au latin vulgaire*. Paris: Klincksieck. (1963年初版)
- Viridis, Maurizio (1978) *Fonetica del dialetto sardo campidanese*. Cagliari: Edizioni della Torre.
- Wagner, Max Leopold (1938-1939) “Flessione nominale e verbale del sardo antico e moderno” in: *Italia dialettale* 14. 93-170, 15. 1-30.
- (1943) “La questione del posto da assegnare al gallurese e al sassarese” in: *Cultura Neolatina* 3. 243-267.

———— (1960-1964) *Dizionario etimologico sardo* (DES). Heidelberg: Carl Winter.

———— (1984) *Fonetica storica del sardo. Introduzione, traduzione, e appendice di Giulio Paulis*. Cagliari: Gianni Trois. (*Historische Lautlehre des Sardischen*. Halle: Max Niemeyer (1941) の Paulis による翻訳)

Zink, Gaston (1994³) *Morphologie du français médiéval*. Paris: PUF. (1989 年初版)

[附記]

本研究は、平成 23 年度日本学術振興会科学研究費補助金（特別研究員奨励費）「外国語との接触にともなうサルデーニャ語の変容に関する研究」による研究成果の一部である。